空へ向かう花

小路 幸也

講談社

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

空へ向かう花

小路幸也

講談社

|著者| 小路幸也　1961年北海道生まれ。広告制作会社勤務を経て、ゲームシナリオなどの執筆活動へ。2003年に『空を見上げる古い歌を口ずさむ』で第29回メフィスト賞を受賞し、デビュー。『東京バンドワゴン』は「2006年度本の雑誌上半期ベスト4」に選ばれた。近著に『ピースメーカー』、『猫と妻と暮らす 蘆野原偲郷』、『夏のジオラマ』など。読む者に懐かしさと優しさを与えてくれる著書多数。

空へ向かう花
小路幸也
© Yukiya Shoji 2011

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2011年9月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
販売部（03）5395-5817
業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277034-7

講談社文庫

空へ向かう花

小路幸也

講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

僕は女の子を殺してしまった。
それから家の中が、静かになった。
もうすぐ死んでしまった女の子の誕生日だったってわかった。
死んだら、あの子にあやまれるかなって思った。
ビルの屋上から飛び降りようとしたら、光が眼に入った。
まぶしくてまぶしくて飛び降りるのをやめて、その光がどこから来るのか確かめた。
ずっと向こうの、小さなビルの屋上。僕に向かってキラキラ揺れてる。
何かが、光ってる。

あの子は死のうとしてる。
わたしはあわてて一生懸命考えて、カバンの中から鏡を出した。
お日さまがちょうど上にあるからそれでわたしはあの子の顔を狙った。
キラキラ、キラキラ、光を反射させて。
死ぬのはやめろよーっ、て思いながら。
そうしたら、その子は飛び降りるのをやめた。
じっとこっちを見て、何が光っているのかを確かめようとしている。
だから、わたしは思いっきり身体を伸ばして両手で手招きをした。

ここへ、おいで。

わたしと、ハル

あの子だ。

ゆっくりゆっくり、ときどき空を見上げながら歩道を歩いている。

首元に紺色とオレンジ色のラインのシャツ。重ね着に見えるけど、あれはそういうデザインのシャツだ。それにカーキ色のジーンズ。髪の毛が少し長めで眼を隠しそうなぐらい。身体は細くて、頭もちっちゃくて、顔で決まるわけじゃないけど賢そうな顔をしてるって思った。

ビルの前でわたしはグレーのパーカーのポケットに手を突っ込んで待ってたんだ。

来るかな、ここがわかるかなぁ、どうかなぁって思っていたんだけど、来た。ちょっと嬉(うれ)しくて、それからとりあえず死なないでいてくれて良かったなぁって思ったら、なんかため息が出ちゃった。

たぶん、同じぐらいの年だと思う。

でもぜんぜん見たことない顔だから学校は違うのかも。

ずっとその子を見ていたら、やっとわたしに気づいたみたいで足がピタッと止まった。まっすぐに立ってわたしを見て、それから今度はきょろきょろしないでちょっと下を向きながら歩き出して、わたしのところまで、来た。

二人で、一メートルぐらいの間を空けて見つめ合ってしまった。なんか照れて下を向いてしまったりして。

「あの」

男の子が顔を上げてわたしの顔を見て、口を開いた。ちょっと怒っているような、困っているような顔をしながら。

「わたしだよ。鏡で光を当てたの」

男の子は、うん、ってうなずいて唇をまっすぐにした。なにも言わない。

わたしも、なんて言っていいかわかんなかった。

この子は、まちがいなくさっき、死のうとしていたと思う。自殺しようとしていた。

死にたいって思うことは、考えたことは、わたしもなかったとは言わないけど、本当に死ぬとこまでいかなかった。やっぱり恐かったし、よく考えたら死ぬのはイヤだ

ったし。

でも、この子は本当にビルの屋上から飛び降りようとしていた。

ゼッタイ、ゼッタイわたしが鏡で光を当てなかったら、止めなかったら、あのまま飛び降りていた。と、思う。

「あの、ね」

「うん」

「さっきさ」

「うん」

「わたしがいたところ。このビルの屋上なんだけど」

「そう、だね」

「ここ、わたしのうちなんだ」

男の子は見上げて、ちょっと驚いていた。

「うち？」

「そう、わたしのうち」

「ここに、住んでるの？」

「ヘンかもしれないけど、ここの二階に住んでるの。おじいちゃんと二人で」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

へぇ、と男の子が小さな声で言った。

それまですっごく暗そうな顔をしてたけど、なんかちょっとだけ柔らかくなった。そう、男の子ってこういう古いビルとか好きなんだよね。うちのクラスの子も、ここがわたしのうちだってわかったら「すっげぇー！」とか叫んで喜んでた。まぁビルって言ってもたった四階建ての、そしてまるで昔の映画に出てきそうな本当に本当にボロボロの古い建物なんだけど。

「ちょっと、行ってみる？」

わたしが上を指さすと、男の子がうなずいた。少しだけ笑った。それでわたしも、またちょっとだけホッとした。笑顔って、それだけで嬉しくなる。

エレベーターもあるんだけど壊れて動かないんだ。自分で扉を閉めて乗るヤツ。とんでもなく古くて、もうこんなのはあんまり残ってないみたい。ときどきだけど、そういう趣味の人なんだろうか、写真を撮らせてほしいってくることもある。すごく嬉しそうな顔をしてエレベーターだけじゃなくてビルのあちこちをパシャパシャ撮っていくんだ。中には自分のブログとかに載せたりしてる人もいる。もちろん、住所なんかはゼッタイに載せないでねって頼んでる。ネットが恐いっていうのはとてもよく知

ってるから。
大理石でできてる階段を四階分上る。男の子は黙ってわたしの後をついてくる。けっこう素直っぽい。
「ここ」
「なに？」
階段とか壁を指さした。
「化石とかあるの？」
「あるよ」
嬉しそうな顔してる。ほらね、男の子はそういうのも好きなんだ。
「探したらけっこう見つかるの。友だちとか、探しに来ることもあるよ」
いいな、って小さく笑ってうなずいていた。
「ほら、ああいうのも」
わたしが指さしたところを見て、少し首を捻(ひね)った。階段の手すりに付いた枠(わく)に怪獣みたいな像があるんだけど。
「ガーゴイルっていうんだって。想像の怪獣」
「ふーん」

「このビルにはね、ああいうガーゴイルが一〇八匹いるんだ」
「一〇八匹？」
「うん」
大晦日にお寺の鐘を一〇八回突くけど、それがなんか関係してるのかどうかはわからないけど、けっこう自慢なんだ。怪獣たちはどれもこれもカワイイから。
いったい何の動物なんだかわかんない、本当に空想して作った怪獣みたいな動物たちで、勝手に全部に名前をつけている。
「あれがいちばんカワイイの。わたしはピグちゃんって呼んでるけど」
一階の廊下の一番高い天井の照明に付いているガーゴイル。犬みたいな顔をしてるんだけど羽もついているし身体はブタみたいだし。それを見て男の子は笑った。
「ホントだ」
なんか、この子は笑うとカワイイ。眼が優しくなる。ずっと暗い顔をしていたからわかんなかったけどけっこうイイ男だと思う。
それから、階段を上ったり少し寄り道して廊下を歩いたりしながら、男の子にガーゴイルをいちいち教えてあげた。あれはモックンにテンダー、あれはアチャポンにローズ、あそこにいるのはギンガーとサッちゃん。

「どういう名前のつけ方なの」
「てきとう、かな？　フンイキで」
「ふーん」
立ち止まってすごく真剣に見ていたから、こういうのも好きなのかも。そうやって名前を教えながら、ときどき化石のありかも教えてあげて、かなり時間をかけて二人で階段を上っていって、その行き止まり。チーク材っていう木の重い扉を開けると風が吹きこんできて、男の子はちょっとだけ眼を細めてた。
「ここが屋上」
うなずきながら、見渡していた。そんなに広くない、屋根のとんがったところを平らにしただけみたいな屋上。
「手すりがないから、端っこに行かないでよ」
「うん」
素直じゃん。さっきは死のうとしていたのに。
「けっこう、狭いんだね」
「そうだね」
広さにすると三十畳ぐらいだっておじいちゃんが言ってた。男の子はそっと歩い

て、端の近くまで行って首を伸ばして下を見た。
「怖いね」
飛び降りようとしてた人のセリフじゃないと思う。
「ねぇ」
「うん」
「さっき、死のうとしてたよね」
振り向かないで、そのまま遠くを見たままうなずいた。そういえば飛び降りようとしていたビルの方を見ている。
「なんで、っていうのは訊かないけどさ、止めた方がいいと思うけど」
男の子はゆっくり、顔から振り向いた。
「どうして、そう思うの」
うん。理由は簡単。
「メイワクがかかる」
「メイワク」
「あんたが下に飛び降りて死ぬのは勝手だけど、そこに、もしも歩いている人がいて、ぶつかっちゃったらどうなるの？　その人も死んじゃうんだよ？」

男の子の眼が少し大きくなった。切れ長の眼。

「そんなニュース聞いたことない？　あるでしょ？　それに、あんたがぐじゃって下に落ちたところをぐーぜん見ちゃった人は、ものすごくツライじゃん。夢に見るよきっと。それが、たとえばわたしたちより小さい子供だったらどうする？　一生悪夢見るよきっと。その子の人生まで狂わせちゃうかも、だよ」

男の子は唇を尖らせた。それから、うつむいた。

「そっか」

「そうだよ」

「考えなかった。そんなの」

想像力が足りないって言うんだ、そういうの。おじいちゃんが言ってた。

「考えてよ。そういうこと考えれば、そんなことできないって言ってた」

「誰が？」

「うちのおじいちゃん」

また、うん、ってうなずいた。あんまりキツイことを言うのも可哀相かなって思って、それぐらいにしておいた。なんだか死ぬのは止めたみたいだし。

扉の横に赤いコカ・コーラのベンチが置いてあって、そこに座ったら？　って言う

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com